

## 海外インターンシッププログラム

派遣国・都市名	アメリカ・ワシントン州シアトル市
研修先	兵庫県ワシントン州事務所
プログラム実習期間	2014年8月25日～9月12日
学部/研究科・学年	文学部3年

### インターンシップ就業実習 報告書

私たちの今回のインターンにおける最大の目標は9月6、7日の土日を使って行われた秋祭りであったため、秋祭りについての感想が主となることを最初に断っておきたい。

私たち（神戸大学からのインターン生2名）は「播州織」、「宝塚歌劇」、「手塚治虫」、「有馬温泉」という4つのトピックを主に取り上げ、秋祭りにおいてボードによる展示と定時ごとのプレゼン、クイズによってPRすることを渡米する前に話し合っ決めていた。「秋祭りのパンフレット」とは、そのプレゼントクイズにおいて使用するためのものである。8月26～29までの4日間はほとんどこの秋祭りのパンフレット作成に費やした。私は「手塚治虫」と「播州織」の部分の担当となった。ここでの反省は2つある。1つは、もう少し、もう一人のインターン生と話し合い、統一したデザインにしておけばよかったということだ。時間の問題もあり十分な話し合いができず個々としてはいいものの少し統一感に欠けるデザインとなってしまった。もう1つは、1つ目と矛盾するようではあるが時間をかけすぎたということである。秋祭りでの展示ボードの作成は毎年の恒例であり、お客さんの目に一番に入るものなのでより早急に進める必要がある。ボードの作成には予想以上に時間がかかったので、今思えばもう少しパンフレットのレイアウトを練る時間をボードに割きたかった。

8月29日にはもう一つ大きな仕事があったはずであった。日本からシアトルに訪問中であった大学生へのインターンシップ生活のプレゼンである。5分ほどこのインターンシッププログラムに参加するに至る経緯をプレゼンするはずだったが、時間がなく、結局他のインターンシップ生の方のプレゼンを聞いてお茶をお出ししてパンフレットの作成に戻った。

その後はプレゼンの英語原稿の作成と展示ボード作成を主に行った。きちんとした計画性、上司への報告連絡相談、チーム内での情報交換などという基本的なことの重要性を実感する期間でもあった。秋祭り前日の午後会場のセッティングでつぶれてしまうので準備は秋祭りの前々日までに終わらせられるよう来年以降のインターン生にはスケジュールリングすることを勧めたい。

さて、秋祭り本番ではいろいろと予想外の出来事があり、本番の状況のシミュレーションの大事さを思い知らされた。まず、予想以上に暑かった。加えて2、3人ほどしか集まってこなかったのでプレゼンテーションの形式も少人数に語りかけるようなものとなり、おのずと時間がかかる。結果、プレゼンテーションは取りやめ、プレゼント（播州織コースター・播州織ハンカチ・はばタングッズ・キーホルダー・リストバンドなど）

とパンフレットを配布するのみとなった。よかったことは、プレゼントが足りなくなるほどお客さんがやってきてくれたこと、プレゼントに喜んでくれたことである。もっと簡単に楽しめるような企画を組むべきだったと後悔したものの、来場したお客さんに少しでも兵庫への興味を持ってもらうという最低限の目標は達成できたと思う。

祭りの終了した後の業務は秋祭りの報告書の作成と1月に行われるシアトルギフトショーのパンフレットの作成であった。二人で分担することにし、私はシアトルギフトショーの業務の担当となった。締め切りまで余裕があるということもあり、できる範囲でやれるだけのことをしたといった感じである。秋祭り終了後は残業もなく仕事としては忙しくなかった。

シアトルでの就業実習体験全体としての反省は、自らのつめこみ癖である。つついレイアウトに拘りすぎ、展示ボードの作成の時間が足りなくなってしまった。仕事は趣味ではないのだから自らのこだわりよりも確実に締め切りに間に合わせることを優先すべきだと痛感した。全体としてはスーパーバイザーの的確な指導と自由な社風のもと色々と学ぶことができる非常に素晴らしい就業体験であった。来年以降もぜひこのインターンシップは行ってほしい。

## 感想および意見

私にとってこれは初の海外滞在であり、(当然ではあるが)初の海外インターンだった。だから、本当に様々な感想がこの胸に去来している。この文章では生活面と仕事面という二つに分類して私が気づいたことを述べたい。

まずは仕事について。非常に自由な雰囲気の中で仕事を任せていただき、自分の裁量の中で一つのイベントでブースを出すということのむずかしさ、楽しさの双方を実感として知ることができた。とはいえ、勤務自体は基本的に朝10時~昼の4時までであり、秋祭り間際には自らの希望で残業をしたもののそれでも6時30分には帰路についていたのでフレキシブルで快適な職場体験であった。私はこのぐらいの仕事と自由時間の比率が私にはあっていると日がたつほどに感じ、非常に満足であった。業務の目玉の秋祭りで感じたことはまず与えられた仕事を完成させることが業務においては肝要であるということである。私は最初に目を見張るような素晴らしいデザインをつくろうと考え、レイアウトにこりすぎた結果、スペースと時間両方の問題で完成させることができなかった。いくつかの反省はあるものの、多くの来場者の方々とお話をし、兵庫県グッズをプレゼントして喜んでいただいたので、やはり非常に楽しい秋祭り参加であった。

続いて生活面である。シアトルの人は本当にいい人が多い。一概に地域でくくれるような問題ではないのかもしれないが、少なくともホストファミリーを含め私と関わった人々は非常に親切であった。これは道をただ歩いているだけでも感じられて、結構な車通りの道路でも歩行者に道を譲ってくれる車は多い。このバスが目的地へ着くのか運転手に聞けば、その駅に着いたとき教えてくれる。聞けば、これがシアトルの文化だという。大きな港を持ち、アジア圏や北欧圏からの移住者も多いシアトルでは他者に親切にするという文化で異文化圏からやってきた者同士のコミュニケーションをスタートするのだ。夏の気候は低湿快晴で、これまた気持ちがいい。観光地間の距離もそれほど遠くないので快適に観

光もすることができた。ホストファミリーとの生活で大事なものは2つのルールを守ることである。一つは、挨拶はする、夜中に騒がないなどの人としての当たり前のルールである。もう一つはその家独自のハウスルールだ。とはいえそれらも人としての常識の範疇に含まれるようなことばかりである。自分の部屋、バスルームは自分で掃除する、夜遅くに帰宅するときは必ず連絡するといったことが我が家のハウスルールであった。ルールを守ったうえで暮らせば、ホストファミリーとの生活ほど安心して快適なものはない。

以上のようなものが私の感想である。願わくは、今後もこのインターンシップが神戸大学で絶えることなく引き継がれてほしい、それが唯一の上申である。

